

Gプロジェクト2013

Be myself ～素直な気持ちを伝えよう～

佐々木 亘, 森永 初代, 濱崎 千鶴, 中村 民恵, 末永 勝征

G Project 2013

– Be myself: Let's Express an Honest Feeling –

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学芸、情報、テキスタイル（モード部門・パッチワーク部門）、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマは、「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。さらに、錦江町からの依頼を機に、新たに“地域貢献プロデュース”も発足した。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、学生たちのレポートをもとに報告する。

Key Words: [トリプルパワー] [問題解決能力] [地域貢献] [大学祭] [素直な気持ち]

(Received September 24, 2014)

序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、学生個々がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた五つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。

今回は、学生一人ひとりが「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」という想いを共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。情報プロデュースは、さまざまな活動を行ったが、とくに三部構成の舞台発表の第一部におけるオープニング映像でGプロジェクトを総合的に印象づけた。学芸プロデュースは「Honest feeling～素直な気持ち～」と

*鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

いう動く絵本で舞台発表の第二部を演出した。テキスタイルプロデュース（モード部門）は、ドレス制作を通して表現力を養い、舞台発表の第三部で、一人ひとりがそれぞれ個性的な演出を試みた。テキスタイルプロデュース（パッチワーク部門）は、共同制作やシュシュの制作を通じて大学祭を盛り上げた。フードプロデュースは、アップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで新製品を開発するなど、1・2年生が一致協力して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに、今回から新たに発足した地域貢献プロデュースは、錦江町の方々と協力し独自に舞台発表を行うなど、精力的に活動した。

本報告は、2013年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告を一つの反省材料として、さらなる発展を模索していく。

1. 情報プロデュース

本年度の情報プロデュース選択者3名のうち2名は、年度途中で発足した地域貢献プロデュースも兼ねることになり、夏休みから大学祭まで例年と比べ時間調整が難しかったようである。学生の取り組み状況については、リーダーを務めた米森杏葉の報告を参照されたい。

前期は、与えられた課題をグループあるいは個々で解決し、お互いに情報共有することを目標としていた。しかし、自分の困っていること、解決できないことを学生同士あるいは教員に相談できなかつたり、解決できた場合にも報告を忘れてすることが少なくなかった。グループとして活動するために必要なルール作りを比較的早い時期に検討すべきであった。

後期は大学祭に向けて、集団の力を高めるために自らの役割を考え行動することを目標として活動を行った。前期の反省を踏まえ、できるだけ情報共有を行おうとする姿勢も見られ、一人ひとりが自分の意見を積極的に発言できるようになっていた。また、リハーサルを繰り返す中で、自分とは異なる意見を持つ相手にも耳を傾け、時間がなくてもよりよい作品に仕上げようとする努力が見られた。3名という少ない人数であったために、かえってそれぞれが自分にできることを懸命に取り組んだ。

大学祭後は、各自でテーマを決めて卒業論文に取りかかったが、大学祭を無事に終えた安堵感からモチベーションが下がり、それまで築き上げた集団としてお互いを思いやり、助けあう気持ちも希薄になったように見えた。最後まであきらめずにテーマに向き合い、少しでもスキルアップを図ろうとする学生だけではなく、勝手に自分の限界を決めて、成長をやめてしまう学生も認められた。自らの役割を見出し、集団の力を高めるために行動することの難しさ、個々の目標に向かって自らを高めることができない者への対応をいかにすべきか、考えさせられる一年であった。(森永初代)

情報プロデュースでは、一年間を通し、MacのソフトウェアiMovie '11やKeynote '09などの様々なソフトウェアの機能を学び、パソコンのスキルアップを目指した。前期の活動では、個々のスキルを磨くことに力を注ぎ、名刺や名前シールの作成、入学式や卒業式、体育祭、聖母行列等のビデオ撮影・編集・DVD制作など様々なことに取り組んだ。Macで動作するソフトウェ

アは、初めて使用するものが多く、使い方に慣れるまで分からないことばかりだったが、周りの友人に聞いたり、インターネットで調べたりしながら慣れていった。

また、iMovie '11の予告編機能を使用して、現代ビジネスコース2年生の学生生活の様子を短編ムービーとして制作し、キャンパス見学会で情報プロデュースの活動として紹介した。今年度は、情報プロデュース選択者が3人と少人数だったため、学内行事を題材とした「情プロ新聞」は、学芸プロデュースに引き継いで作成してもらった。

情報プロデュースは、大学祭で現代ビジネスコース「発表部門」のオープニングムービーを制作した。今年度は、コースのテーマであった「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」に沿い、現代ビジネスコース2年生の学生生活で感じる葛藤や成長を映像として表現した。観客の方々が観ている自然と笑顔になるような作品を作りたいという一心で、本番まで何度も試行錯誤を重ねた（図1）。

4月から構成、選曲などを練り始めた。昨年の情報プロデュースの先輩方が制作された大学祭オープニングムービーや本番で用いられていたiMovie '11やKeynote '09などのファイルを見直すと、使用した機能や素材などが分かった。

オープニングムービーで使用する曲は、素直な気持ちが観ている方に伝わりやすく、明るくオープニングが盛り上がるような曲を探し、観ている笑顔になれるように比較的明るい曲調のもの、若い世代の方々が親しみを持ってもらえるようなものを選曲した。採用したケラケラ「スタープレイション」の楽曲時間に合わせ、約4分37秒で制作を行うことになった。

オープニングムービーで使用する素材は、4月から集め始め、現代ビジネスコース2年生が各プロデュースで活動している様子や普段の学生生活で頑張っている姿をビデオカメラやデジタルカメラで撮影した。撮影する際は、無意味なズームやカメラのぶれが起こらないように1つのカットを5秒位で撮るように注意した。

編集は、2年生になってから、「コンピュータ応用演習Ⅱ」や「情報プロデュースⅠ」などの授業で学んだiMovie '11やKeynote '09などの知識を生かして制作に取り組んだ。シーンの移り変わりは、iMovie '11のトランジション機能を使用し、場面の移り変わりが、分かりやすくなるようにした。

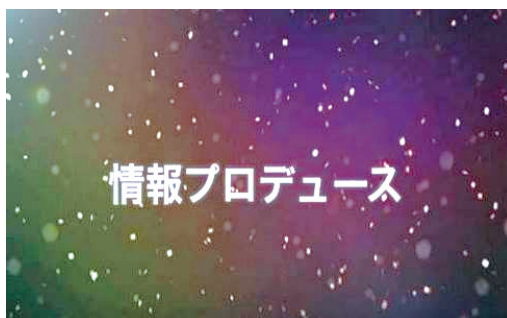


図1 最初のスライド



図2 最初のシーン



図3 オープニングラスト

今回、私たちが最も尽力した点は、動画中に音声だけでなく文字を挿入したことである。10月に初めてリハーサルをした際、先生方から「何を伝えたいのかが分かりづらい」という指摘をいただき、情報プロデュースのメンバーで話し合っ、て、「大学祭の準備でプロデュースごとに大変だったことや伝えたいことを文字にして取り込む」という結論にたどり着いた。言葉を挿入したことで、オープニングムービーの内容が凝縮され、伝えたいことが明確になった。

最初のシーン(図2)とラストシーン(図3)には、現代ビジネスコース2年生が大学祭の準備過程で感じた言葉を取り込み、プロデュースの紹介シーン(図4)では、各プロデュースの大学祭への思いを取り入れた。

リハーサルを通して、他にも「オープニングムービーの流れが分かりにくい」や「写真が見づらい」などの指摘をいただき、その都度メンバーと話し合った。客観的な意見をいただいたことで、新しい発見があり、視野を広げることができた。

また、大学祭以後は、卒業論文の制作に取り組み、先生方にアドバイスをいただきながら、何度も修正を重ねた。

皆と協力し、支えあいながら少しずつ大学祭の準備を進め、その過程で感じたこと、学んだことはとても大切な経験になった。メンバーの1人が地域貢献プロデュースのリーダーを務めていたため、時間を合わせることもとても難しかった。しかし、3人で効率的に役割を分担し、協力して活動に取り組んだ。また、一緒に活動したメンバーや周りで支えてくださった方々の協力があつたからこそ、完成させることができた。



図4 プロデュースの紹介シーン

この情報プロデュースのオープニングムービー制作を通して、チームワークや相手のことを考えて行動することの大切さを学んだ。これから社会に出るにあたって、周りの人への感謝を忘れずに、何事にも学ぶ気持ちを持って取り組んでいきたいと思う。(米森杏菜)

Ⅱ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースの共同研究では、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。これまでの「動く絵本」は、毎年多くの改善点が見られたが、基本的に絵は原画をパソコンに取り込んで固定されており、動くといってもセリフに合わせてめくっていくという動きしか出せなかった。その意味で、「動く絵本」というよりは、むしろ、「デジタル紙芝居」と表現した方が正確だったとも言えよう。

もちろん、これまでの学生の活動をけっして低く評価しているわけではない。つねに、「昨年度の作品よりも、より良い動く絵本を！」という目的で、学生たちは創意工夫を凝らしてきた。しかし、6名前後の人数では、原画作成だけでもかなり多くの時間をとられてしまい、毎回、夏休み中も活動して、どうにか大学祭に間に合わせてきたというのが実情であった。

ところが、2013年度はメンバーが10名に増えたことにより、今まで出来なかった工夫が可能

となった。すなわち、単に固定された絵がめくれていくのではなく、なんと絵の中に動きを持たせるという、画期的な内容になったのである。

学生自らがとても積極的かつ主体的に取り組んだ結果、「Honest feeling ～素直な気持ち～」という「動く絵本」は無事完成し、大学祭2日目の2013年10月27日（日）に、舞台発表の第二部を飾ることができた。ただ、人数が多かったために、一致団結することの難しさはいろいろ見うけられた。個の努力をいかに総合・統合して全体の結果へと結びつけるかが、今後も大きな課題となるであろう。（佐々木亘）

学芸プロデュースでは、共同研究として大学祭での発表を目指し、新しいことへの挑戦を念頭に「動く絵本」の作成に取り組んだ。当初新しい演出方法として、コマ撮りやアニメーションのような作品制作を考えましたが、メンバー内にノウハウを知っている人材はおろか、普段から創作活動している者がわずかにしかいなかったため断念をした。

そのため、初心者でもできるシンプルな作りにしようと、前年度に比べ、「スライドの枚数を増やす」、「Keynoteの機能を駆使する」、「撮影した写真を模写してよりリアルにする」など、できる限りの工夫をし、観客を引きつける作品を作ることを目指した。パソコンを主として使うことで、表情や季節の変化について一つの基本となる画像を作り、それを少しずつ変化させ、画面に動きを出すことができた。この点は、今回の大きな特徴といえるだろう（図5）。



図5 表情の変化

作品の内容については2013年2月の段階からプロデュース内で話し合い、人からどのように見られたいか・評価されたいかを念頭に置きながら考え始めた。当初の意見として人に感動してもらえる作品、他のプロデュースに負けない作品が出され、今まで感動した作品は何か考えそれぞれが感動した作品の内容を挙げていき、その参考として、全員で「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ モーレツ！オトナ帝国の逆襲」を視聴した。

この視聴を通して、何か劇的な変化があったわけではない。しかし、みんなで一つの作品を観ることで、どうして感動するのか、どうして涙を流してしまうのか、どうして作品に引き込まれるのかを考えるきっかけになった。その意味で、メンバー全員で作品作りに取り組む姿勢ができたように思える。そして、今年度のテーマである「素直な気持ちを伝えよう」に添って我々は「Honest feeling ～素直な気持ち～」というタイトルで動く絵本を作成した（図6）。

二十歳という大きな節目を前にして、「私たちは今まで支えてくれていた親に対して素直な



図6 学芸テーマ

気持ちを伝えているか」,そして,「いつか母親になった時,私たちは自分の子どもに対して気持ちを伝えることができるだろうか」,というテーマで作品を作り始めた。親子2つの側面から描きたかったため今までの作品にはなかった,2人の登場人物を主人公として描いた。

こうして登場人物を限定することで,私たちの思いはより明確に表現できたように思える。また,すべてをデジタルで表現するのではなく,所どころ手書き表現を用いることで,見ている人を飽きさせない効果を与えることもできたのではないだろうか。

さらに,今回から絵や視覚的演出以外にも声優の演技を工夫したり,BGMやSE(効果音)も取り入れたりしてより多角的に楽しめる作品作りを目指した。こうすることで,絵を担当しないメンバーが意欲的に参加することができるようになった。また意見も出しやすくみんなで試行錯誤しながら作業ができたように感じる(図7)。

学芸プロデュースの活動を通して,今回「素直な気持ちを伝えよう」というテーマを常に念頭に置いて作業していたつもりではあるが,実際のところ思うように意思疎通ができなかったことも事実である。



図7 制作現場

たしかに,二十歳になる私たちが両親に素直に思いを伝えることができたなら,というテーマで作り始めた作品ではある。しかし,作業中に,友人や仲間たちに対して「素直な気持ち」で言葉をおかわすことができたかと問われれば,答えに窮してしまう。皆どこか思うところがあったようで,時折言葉を濁していたのである。そんな我々を支えてくれたのが,身近にいた先生方であった。

暗中模索の中,作業をしていた際にいつも先生方からアドバイスをいただくことができたことは,非常にありがたかった。そして何かしらの突破口が見つかる心にとりかえ,メンバーと言葉をようやくおかわすことができたのである。作業を通じて感じられたことは,メンバー全員が皆,「何か自分も手伝いたい」という意欲はあるけれども,「どうすればいいのかわからない」という気持ちが強いことであった。この点は,クオリティの追求よりもチームワークを意識し,メンバー全員参加型の1つの作品を作った方がより有意義だったのではないかと反省している。

しかしながら「Honest feeling～素直な気持ち～」は多少作業量に偏りがあったとしても,このメンバー10人だからこそ作れたものと断言できる。なぜならば作業中誰もが真剣だったからだ。

作品作りにおいて大事なものは力量ではなく心の持ちようだと私は考える。私一人では作り得なかった作品がみんなの力で完成させることができたのだと思うと感慨深く,メンバーのみならず,ご指導くださった先生方にも感謝し,素直に気持ちを伝えることの大切を実感している。(有村歌織)

Ⅲ. テキスタイルプロデュース（モード）

今年で六回目となるGプロジェクトであるが、これまでの先輩たちのノウハウをもとに今年も学生たちが一丸となって、作品制作から舞台発表まで取り組んだ。改めて、先輩たちの存在によって支えられていることを強く感じ感謝する機会となった。学生たちを舞台発表まであきらめずに導いてくれたのは、先輩たちの残してくれた活動記録の存在である。舞台発表やリハーサル、練習風景の映像を収めたDVDはもちろんのこと、特に日々の活動内容を記録したノートは学生たちにとって心強い道標となっている。たまにノートに頼りすぎて、失敗する場面も見られたが、できるだけ学生の主体性にまかせ指導することにした。学生たちは失敗から学び、次に何をしなければならないかを考え自然と自ら行動できるようになる。

リーダーの小原琴乃が中心となり、舞台で今回のGプロジェクトのテーマ「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」をいかに演出するか考えた。メンバー全員に理解してもらうために、何度もミーティングを重ねたが、この活動を通して、リーダーは頭で考えたことを表現することの難しさに直面したと報告している。一方で、メンバーもそれぞれに自分の想いをうまく言葉に表現できず、伝えることの難しさを経験し何度も話し合い（ミーティング）を重ねることで、お互いの意思疎通を図ることができた。

舞台構成は、まず、それぞれがデザイン・制作したドレスを演出に合わせたシーン毎にグループ分けすることから始まる。最も大切なことは、そのグループ内で心をつなぐことである。グループ内やグループ同士のぶつかり、数々の衝突を繰り返しながら、学生たちは今までにない舞台発表にしたいという強い想いからチームとして心をつなぐ。一方で、演出に沿った形で自らをいかに魅力的に表現するかという課題と向き合う中で、新しい自分を発見することができたサブリーダーである宮内和沙が報告している。この新しい自分を発見することもGプロジェクトの教育効果ではないかと考える。

舞台発表までの道のりはさまざまな苦勞の連続であったが、Gプロジェクトで築きあげたメンバーの心をつなぐ「絆」は卒業後もつながっている。卒業生は、後輩達のためにかかけつけ、アドバイスをしてくれる。特に、舞台の練習で表情や動作など表現力の指導が大きな励みとなっている。

ドレス制作は個人であるが、舞台発表はチーム力である。お互いに仲間の意見を受け入れることができるようになるまでの衝突も人間力を高めるうえで必要なプロセスであると言える。（中村民恵）

テキスタイルプロデュース（モード部門）は、24名での活動となった。今年は、「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」というコーステーマから、周りの方々への感謝の気持ちを伝えたいという想いで、メンバーが一丸となり取り組んできた。

メンバーが多かったこともあり、ドレスの色合いはカラフルなものとなった。そのため、舞台構成の最初に白系のドレスを登場させることで、演出として「0からのスタート」をイメージし、色鉛筆の並びのように徐々に色を付けていき、ダーク系の大人の女性をイメージしてエンディングにもっていった。

今年度は、舞台構成にこだわり、ウォルト・ディズニーの曲を中心に選曲した。ディズニーの曲は、曲調が似ているものが多く、曲の順番を決める際にもとても苦労した。そこで、それぞれのドレスのイメージの曲を提案してもらい、全体のバランスを見ながらできるだけメンバーの意見を聞くようにした。

メンバーの意見をもとに先生とのミーティングを繰り返しながら、舞台での曲合わせを行い使用する曲を決定した。構成は全部で7つのシーンに構成して、まずシーン1では、ディズニープリンセス・グローバルテーマソングの「ザ・グロウ」を用いることで“純粹さ”を表現。シーン2では、リトルマーメイドの「kiss the girl」を使用して、“元気な女性”をイメージし、続くシーン3は、ピートとドラゴンの「水辺のろうそく」によって、“しなやかさ”を表そうとした。

中間部分となるシーン4では、「STAND MY GROUND」を使用し、“かっこいい女性”を表現した。この曲だけは、ディズニーの曲ではない。舞台構成にメリハリをつけるために、この曲を中間地点に置き、あえてダークな色合いを演出することで次の曲をより引き立たせるための工夫である。このシーンが前半の山場となり、後半のシーンにつないだ。

そして、シーン5では、シンデレラの「Beautiful」を用いて、“美しさ”を表し、続くシーン6には、ヘラクレスの「恋してるなんて言えない」で“素直さ”を表現。最後のシーン7は、ムーランの「リフレクション」によって、“逞しい女性”を伝えようとした。構成を考えるために、何十もの曲を聴き、自分たちの表現に合うような曲を探すことにとっても苦労したが、ディズニーの曲は、聴くだけで心が和み、優しい気持ちになれる。その曲にのせて演出することで、素直さを舞台上で表現し、全体を通して、周りの方々への感謝の気持ちを伝えることができたのではないかと考える。

また、舞台裏方については、本番直前までスタッフ同士で確認を行い、照明・スポット・音響の3つのタイミングをしっかりと合わせることで、より舞台を魅力的に演出できるように構成した。舞台構成において、先輩方の残してくださった記録を基に、自分たちなりにこだわった照明は、「STAND MY GROUND」のシーン4である（図8-a）。かっこよさを演出するために出演者の3人が一斉に顔を上げるところに照明とスポットが当たるよう、そのタイミングを何回も練習した。このシーンは裏方スタッフである1年生との連携のもと、試行錯誤の連続であったが、本番では、照明とスポットによって舞台の魅力が全然違うということを実感した瞬間となった。



図8-a シーン4

シーン1の始まりは、真っ暗な舞台の真ん中に出演者が座った状態からのスタートで、曲が流れ、立ち上がると同時に、緑の照明を加え、また、サスペンションとシーリングを使用して徐々に明るくしていき、最初から華やかさを演出するよう工夫した（図8-b）。全体としては、曲調に合わせて照明とスポットを調整



図8-b シーン1

し、「ドレスが際立つようにするにはどのようにすればいいか」、「お客様に飽きさせないようにするためにはどのような工夫が必要か」を全員で考えながら、意見を出し合い、一つの舞台を完成させたのである。

大学祭での舞台発表に向けて、4月から制作に打ち込んできた。最初はドレスを制作することが楽しかったが、道のりは決して楽しいことばかりではなかった。先輩方の記録ノートの反省から、自分たちは意識して、全員が計画的にドレスを制作するように心掛けた。しかし、先輩方の忠告もむなしく、なかなか計画通りには進まない。自分たちの立てた計画の甘さを実感させられた。

8月に夏休み期間があるということが気の緩みを招いて、前期中に終わらせる予定だったところまで終わらず、制作過程において個人差が出てくるようになってしまった。制作過程により仕方のない部分もあったが、先を見据え、自分が今何をすべきかを考えながら計画的に行動することがいかに大切かを学んだ。

本格的に舞台での練習を開始したのは、9月になってからである。先生と共に一人ひとりの動きや構成などを考えた。最初は、とても緊張し、ただ歩くことだけで精一杯のメンバーであったが、5月から毎朝続けたウォーキング練習、大講義室での練習の積み重ねを通して、少しずつ一つのショーになっていった。そして、練習をしていくなかで、自分のことだけでなく、誰かのために何ができるかという、人を想う心の、そして、人とのつながりの大切さを実感することができた。

発表当日、大講義室からあふれるくらい多くのお客様にショーを見ていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。メンバー全員で舞台に立つことができたこと、サブリーダーとして、舞台に立つことができたことは私の一生の宝物である。舞台発表に至るまでの過程は決して平穏な日々ではなかった。しかし、これを乗り越えることができたのは、メンバーとの支え合い、協力のおかげであると実感している。

私自身がモードを選択したのは、去年の先輩方の輝いている姿を裏方スタッフとして近くで見ただけという本当に単純な理由だった。しかし、実際にはドレスを制作することもサブリーダーとして活動することも考えていた以上に大変であった。周りのことに臨機応変に対応することが苦手な私にとっては苦悩の連続で、リーダーを支える立場にもかかわらず、支えられていることが多く、本当にメンバーにはとても感謝している。

舞台発表を通して、舞台に立つことの責任や重みについても考えさせられた。また、心をつことにすることの難しさを感じ、一人でも欠けていたら駄目だということを強く感じた。道のりは苦難の連続ではあったが、それぞれが自分らしさを表現し、新たな自分を発見

することができたのではないかと考える。一つのことを最後までやり遂げる忍耐力や自ら積極的に行動することの大切さを学び、とても貴重な経験をすることができた。活動から学んだことを心に留めながら、常に感謝の心と謙虚さを忘れずに、これからも歩いていきたい。(宮内和沙)



図9 学内発表後

Ⅳ. テキスタイルプロデュース (パッチワーク)

2013年度テキスタイルプロデュース (パッチワーク) の選択者は六名と少なかった。少人数のよさは、お互いのスケジュールが合わせやすく、まとまりやすいことである。実際にみまで協力し活動できていた。

活動内容は大学祭に向けての個人作品・共同作品・シュシュの制作であった。個人作品には各自の想いを、共同作品には六人の想いを、シュシュにはみんなが一つになれるようにとの想いを込めて制作に取り組んでいた。

前期のほとんどは個人作品に力を注いでいたが、共同作品はその合間をぬって夏休み前からデザインの構成・配色・表現の仕方を練っていた。共同作品のデザイン等に関しては、現代ビジネスコースのテーマに添って、学生自身が自由な発想で表現できるようにと思い、私自身はできるだけ口出ししないように心掛けていた。ただし、技術面に関しては、よりいいものを制作することを目指してほしかったので、細かいところまで指導した。

以前に比べ針仕事をする機会が減ってきている中で指導には大変なものがあつた。しかし、一つひとつの作業をこなしていくことで、学生自身にも自信がつき、新しいことへのチャレンジ精神が出てきたのではないかと思う。

一つ失敗したことは、確認不足のため、スペルが間違っていたことである。リバースアップリケという表地を切り抜いての作業工程だったため大変だった。というのも切り抜いた後に間違いに気づいたのである。lをeに変えることは至難の業だったが考えた末、eのサイズを大きくすることにした。そうすることで文字のバランスが崩れることも懸念されたが、これが意外にも良い味を出してくれた。

展示に際しては、昨年の反省でも出ていたのだが、今年も教室内の展示場所が少なかったため、大きな作品は廊下に展示することとなった。昨年の反省を踏まえ、廊下にも作品があることをお知らせするために、声掛けを行ったので、多くのお客様に見ていただけたのではないかと思う。

プロデュースの活動を通して、学生一人ひとり成長したと思われる。なぜなら、積極的に活動に参加し、自分の意見を率直に発言し、かつ相手のことを思いやれる心が見えてきたからである。(濱崎千鶴)

□個人制作

個人制作では、クッション、バッグ、ワンピース、エプロン、絨毯などそれぞれの思いが詰まった温かい日用的な作品となった(図10)。

色、形、素材にこだわりを持ち、試行錯誤しながら共同制作と並行して、自分の思い描いたものを形にすることができた。

展示をする際には、作品名と作品を通して伝えたいこ



図10 展示の様子 (教室内)

とを文章でカードにまとめ、見てくださったお客様に伝えることができるように工夫をした。実際に来られたお客様は作品を真剣に見てくださり、どのように制作したのか、どれくらいで作り上げたのかなどと質問をされた。コメントもしてくださった。私たち一人ひとりが一針一針心を込めて制作した思いが届いたのではないかと感じている。

□共同制作

2013年度の現代ビジネスコースのテーマは「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」である。このテーマをもとに、パッチワーク選択者全員で話し合い、「素直」で連想するものを挙げてデザインを決め、「サンボンネット・スーの壁掛け（図11）」と「シュシュ」を共同制作とした。

また、パッチワークで有名なキャラクター「サンボンネット・スー」に本学の制服を着せることで、オリジナル性を表現してみた。布は8月17日にパッチワーク選択者全員で買い出しに行き、私たちの表現したい気持ちが伝わるように、色合いを考えながら選んでいった。

○サンボンネット・スーの壁掛けの制作工程

はじめに、現代ビジネスコースの「Be myself」という自分らしさを表現するために、2年生全員の名前の刺繍をすることに決めた。色はより個性を出すために、アンケートを取りそれぞれの好きな色に決め、正方形のパーツ一つに一人の名前を刺繍した。名前を刺繍したパーツを含め、使用したパーツは、105枚である。その105枚の正方形のパーツを斜めにしてつなぎ合わせ、大きなハートを作り、その後キルティングを施した。

次に、テーマである「素直な気持ちを伝えよう」を表現するために、羽をつけた天使のサンボンネット・スーがハートを支えているデザインにした。こだわった点は2つある。一つは、サンボンネット・スーの衣装を私たちの制服にしたこと。もう一つは、学章を刺繍したことである。細かい部分にもこだわって制作することで、自分たちの思いを作品の中に入れることができた。

このサンボンネット・スーもアップリケとして下地に縫いつけた後、キルティングを行った（図12, 13）。タイトルは視覚からも伝えたいと思い、上部に配置することにした。「Be myself」はリバースアップリケの技法を用い、「～素直な気持ちを伝えよう～」はソフトエンプロイダリーを用いて、刺繍した。コーステーマを入れることにより、より見てくださる方々へ私たちの気持ちが伝わったのではないかなと思う。

今年度の作品は、100cm×120cmと例年より大きな壁掛



図11 共同作品（完成）



図12 制作工程



図13 制作工程

けとなった。8月26日から制作を開始し、完成は10月24日であった。名前の刺繍，パーツの縫い合わせ，キルティング，サンボンネット・スーのアップリケ，テーマの刺繍と六人でプロデュースの時間や空き時間を活用しながら分担して制作し，メンバー全員で作りに上げた作品となった。大きな作品だった分，キルティングの作業は2～3名で同時に行うことができたので良かった。

○シュシュ (図14) の制作過程

シュシュの布は，8月17日に購入した。パッチワーク選択者全員で，裁断，ミシンがけ，ゴム通し，最後の始末（手縫い）と分担をし，流れ作業で行った。2年前の先輩からの伝統を守り，今年も現代ビジネスコースの学生の団結力を高めたいと願って，全員分制作した。

今回は，花柄の生地を用い，色は赤，青，オレンジの3色から選べるようにした。普段の学生生活でも使用するなど，すごく好評であった。大学祭当日は，髪を結んだり，身につけたりと，コース一丸となって大学祭を盛り上げる立役者になっていたと思う。



図14 シュシュ

□制作を通して

パッチワーク選択者は六名と少人数であったが，それぞれが自分の役割を理解し，メンバーを思いやる行動ができたのではないだろうか。また，個人制作と共同制作は同時進行で行っていった。個人制作では，各人が自分でしっかりと計画を立てそれに基づき期日までに完成をさせるように気を付けなければならなかった。

一方，共同制作ではメンバー全員の予定を把握し，自分のペースで制作に取り組むのではなく常に相手のことを考え行動し完成させることが大切である。一人だけに負担がかかることのないよう，全員で協力し作り上げるようにするため，メンバー間で定期的に進捗状況を伝えあったり，これからの動きを伝えたりと情報共有に努めた。その結果，限られた時間でも効率よく作業を行うことができた。

作品は一つひとつの作業が細かいので，丁寧に取り組むことが大切であったが，全員，今年のコーステーマを胸に一針一針思いを込めて制作していくことができたと思う。デザインから全員で話し合い，布の買い出しにも行き小さなパーツを縫い合わせるなど，たくさんの思いを込めて制作した作品だったので完成したときは，とても嬉しく達成感があった。

制作においては，いつも他愛のない会話をしながら，メンバー間でのコミュニケーションを取っていったので，この共同制作を通してより絆が深まっていったのではないかと感じられる。個人制作と共同制作では，同じ制作であるとしても，作業する過程や行動は全く異なってくる。そのため，自分自身との対話，人との対話の大切さを学び感じながら取り組むことができた。(田中有紀)

V. フードプロデュース

フードプロデュース35名の活動内容は、鹿児島県の食について学び実習を行うと同時に、大学祭で販売するアップルパイ、クッキー、Gカフェで販売するメニューの試作と制作である。昨年より選択者が多かったため、活動を行うにあたって総合リーダーはまとめるのが大変だったようである。

総合リーダーを筆頭に各リーダー、サブリーダーがフード選択者の2年生だけではなく、各係りの1年生をもまとめなければならない。最初は各リーダー同士またはリーダーとサブリーダーの連携がうまくいかず、思うように進めることができずにいたが、試作やミーティング等を重ねることで、報告・連絡・相談・確認の重要性を理解し、各自の役割を果たしていけるようになった。また他のフードのメンバーも仲間の姿をみて学び、行動に移せるようになっていった。

今年度行った活動成果の一つは、これまで販売できなかった紫芋のクッキーを販売まで持っていけたことである。クッキー担当の学生たちは先生方の助言を受け、何度も試作を繰り返し、やっとの思いで完成させた。販売できなかった理由（問題点）の一つひとつを解決していく過程において多くのことを学び、思い描いた色が出た時の達成感は大きかったはずである。

また、アップルパイ作りは、学生一人ひとり真剣に取り組み、一人一個あるいは流れ作業で作れるようになったことは、各自の自信につながっていったと思われる。そして、Gカフェでは、保健所からの指導により冷たいものはオリジナルとして作ることはできなかったが、温かい飲み物として新商品の試行錯誤を繰り返し、販売した。

自分たちで考え、試作を行い販売するまでの過程で、作業を行う上での計画性、お互いの連携・協力することの大切さ、みなを一つにまとめ、指示を出すこと難しさ等を学ぶことができたのではないだろうか。（濱崎千鶴）

食品販売部門に所属する現代ビジネスコースのフードプロデュースでは、1年生がクッキー、2年生がアップルパイ、そして、1年生と2年生合同でGカフェを企画から運営までを行う。今年は、フードプロデュース選択者35名で活動した。

大学祭に向け活動するにあたり、各部門（クッキー・アップルパイ・Gカフェ）では、リーダー・サブリーダーを決めた。リーダー・サブリーダーは、物事をスムーズに進め、計画が遂行されるようにすることが役割である。大学祭に向けての活動は、3月末に行われた学生会主催のリーダーシップトレーニングで始まった。

このリーダーシップトレーニングでは、先輩方からの引継ぎノートを参考に、大まかな年間計画を立てた。その後、昨年の先輩方の反省点を活かし、早め早めの行動を心がけ、4月から各部門試作を始めた。それぞれの活動内容等を以下にする。



図15 アップルパイ撮影の様子

○アップルパイ

アップルパイは伝統の味を守るため、先輩方が残してくださったレシピや先生方の指導のもとに作った。例年、作ったアップルパイを展示する際には、商品とレシピをおくだけであったが、今年度は実際に作っている様子を動画として展示の部屋で流し、作り方をみてもらうようにすることにした。その結果、「レシピだけでは想像できなかったのでもとても良い」などと言った意見をいただくことができたので、ビデオを制作してよかったと思う。

反省点としては、当日の販売方法に関して、並んでくださる方の列の向きや、整理券を配布するまで長い時間待ってくださったお客様へ、椅子の準備や声かけなどの対応が必要だったことである。

○クッキー

クッキーは、1年生のクッキー係りを決定した後、今年が目玉商品となる味の候補を決めるため、アンケートを実施した。昨年販売した種類のクッキーとアンケート結果で多く意見が寄せられた紫芋クッキーなど約12種類を販売する候補として挙げた。

そのなかでも、今まで先輩方が断念していた紫芋の試作を重ね、販売を実現することができた。これまで販売できなかった理由として、味がはっきりしない、見た目が良くないなどが挙げられる。この問題点を解決するため、食物栄養専攻の先生方のご協力をいただきながら、紫芋のパウダーを増やすことと、重曹とベーキングパウダーを抜くという方法を行ってみた。その結果、形や触感は多少ほかの商品とは違うものの、きれいな紫色を出すことに成功し、販売を実現することができた。



図16 クッキー作りの様子

○Gカフェ

Gカフェは、保健所からの指導によりアイス商品は手を加えないものを販売することが条件だったので、そのことを伝えたくて、クッキー同様アンケートを実施した。アンケート結果をもとに候補となる商品をピックアップし、試作を行い、その中から販売商品を絞り込むことにした。その結果、今年度のGカフェの活動を行ううえでの具体案として、2つを取り上げた。一つはホット商品に力をいれることであり、もう一つはフォームミルクの機械の導入をすることである。

大学祭当日は、食品販売部門の先生の提案により、急遽、Gカフェの移動販売を行なった。反省点として呼び込みがもっと必要だったことや、1日目を終え、あと何杯作れるかきちんと計算するべきだった点が挙げられた。

大学祭の総売上については、以下の通りである(表1)。

表1 大学祭総売上（単位：円）

部門	売上	経費	純利益
アップルパイ	101,000	70,750	30,250
クッキー	71,700	35,670	36,030
Gカフェ	163,700	73,487	90,213
合計	336,400	179,907	156,493

○まとめ

大学祭では、フードプロデュース選択者35名と1年生が力を合わせ、また日ごろお世話になっている方々への感謝の気持ちを込めることで、良い商品を作ることができたと思っている。アップルパイにおいては、テレビ局の取材を受けることができ、アップルパイの宣伝に繋がった。これは今まで先輩方が作り上げてくださった伝統を受け継ぎ続けた結果である。

Gカフェは、昨年、衛生面を考慮し先輩方が考えてくださったドルチェゲスト使用について、コストと時間、提供できる種類の問題から使用しなかった。また保健所からの指導により、オリジナルのアイス商品を販売することができなかつたので、市販ものを使用した。できるだけ人の手を加えず、衛生・安全面に細心の注意を払い、提供することを心掛けた。クッキーについても、過去の先輩方が紫芋のクッキーを作ることを断念していただけあって、販売実現のための道のりはとても安易なものではなかつた。

多くの方に支えられ、企画運営まですることができた。伝統を守りつつも新たなことにチャレンジできたことは、今年の大きな成果であると感じている。幾度となく失敗し、くじけそうになったこともあったが、仲間と支えあいながら、思い出に残る大学祭を作り上げることができ、学生生活がとても充実したものとなった。後輩たちにもこのチャレンジ精神を受け継いでもらい、伝統を守りながらも、様々なことに挑戦し、素敵な大学祭を作り上げてほしいと思う。(増尾早紀)

VI. 地域貢献プロデュース

地域貢献プロデュースは、錦江町役場から町のPRのための衣装制作を依頼されたことをきっかけに発足した新しいプロデュースである。既存のプロデュースは、1年次に希望調査を実施し選択者を決定し、年度当初から大学祭に向け計画的に準備を行っている。年度途中に従来の活動に加え、衣装制作を行うことは難しいと判断し、授業時間以外の空き時間や放課後などを利用し活動することにした。参加する学生は公募することにしたが、従来のプロデュースに加え活動することになるため、参加者が集まるかどうかの不安もあった。しかし、興味を持った学生が掲示物を作成するなど、積極的に取り組むことによって、徐々に人が集まり最終的には13名になった。学生の取り組み状況については、リーダーを務めた川畑美和子の報告を参照されたい。

学生たちは衣装制作以外にも錦江町PRのためのさまざまな活動に参加することで、地域の

現状を知り課題に目を向けることができた。学生たちが文字通り休みを返上し、行ったボランティア活動は、地域の一員として社会的な役割を果たせることを証明してくれた。参加した学生たちは2つのプロデュースを兼ねたために、有効に時間を使うこと、周りを巻き込み協力を得ることで一人ではできないことも実現可能になることを認識できた。一人ひとりが自らの役割を見出し、集団の力を高めるために行動できたように思う。

結果として、2014年度入学者カリキュラムから特別研究の一つとして正式に「地域貢献プロデュース」を加え、3月には錦江町と「包括的連携協定」を結ぶことになった。今までのGプロジェクトは、学内のみに限定された取り組みであったために、比較的スケジュール調整も難しくなかったが、地理的にも遠い錦江町役場の方を含めた関係者と日程を調整することの難しさ、会議をスムーズに進めるために資料を作成するなど事前の準備が重要であること、打ち合わせた内容を議事録に残すことは、会議に出席した人だけでなく、都合により欠席した人と共通認識を持つために必要であることなど、今までにない気付きがあった。今後も地域の活性化のために継続した取り組みを行う予定である。(森永初代)

地域貢献プロデュースは、「くわがたガールズ」の衣装制作を錦江町から依頼されたことをきっかけに、本年度から発足したプロデュースである。衣装制作活動を通して錦江町をPRすることを目標に活動してきた。

学外の方とプロジェクトを進めていくという経験は初めてで、とても不安であった。また、前例もなく、何をすることも手探りで、失敗を何度も繰り返したが、地域貢献プロデュースのメンバー13人をはじめ、コース内の先生方のご指導や学生会の方々のご協力を頂きながら、活動を進めることができた。

単に衣装制作といっても、デザインの起案や錦江町の方との打ち合わせなど、たくさんの手順を踏まねばならなかった。「テキストスタイルプロデュースⅠ」で自分の浴衣を作成し、裁縫に自信はあったものの、「多くの人に夢や憧れを与えていきたい」と意気込んでいらっしやる「くわがたガールズ」の衣装を作成するのは、とても大きなプレッシャーとなった。

リニューアル以前の「くわがたガールズ」の衣装(図17)は、メイド服を連想させるもので、頭にくわがたのカチューシャをつけていた。錦江町の自然の豊かさを表現するために、100円で販売されている造花を使い安全ピンで装飾されていた。なお、旧衣装は、すべて既製のMサイズであった。

新衣装に対する錦江町の要望として「くわがたの特徴を醸し出すこと」、「かわいらしく、子供達が憧れる衣装にすること」、そして「大腿部の絶対領域が確保されていること」などがあった。また、「くわがたガールズ」は錦江町住民のボランティアで活動しているため、メンバーが固定されていない。そのため、サイズ調節が容易に行えるようなデザインにすることが重要



図17 旧衣装くわがたガールズ

だった。

衣装制作を手掛けるにあたり、複数の人が着用する事や洗濯のしやすさを考慮し、丈夫で色落ちのしにくい綿100%のブロード生地を採用した。また、くわがたらしさを出すために、身ごろはくわがたのお尻の部分を連想させるような丸みのある形に。裾は羽をイメージし、きれいなフリルが出るようにした。さらに、左右非対称のデザインにすることで動きをもたせ、かわいらしさを演出した。

錦江町の方々の期待に応えようと、朝や放課後、土日や夏季休暇を使って活動した。打ち合わせに間に合うように大切に縫った衣装だったが、打ち合わせでは新しいアイデアが次々と出てきて、ほどいては縫ってを何度も繰り返した。そのたびに、実力の限界を感じ、弱音しか吐けない時期もあった。しかし、失敗する中でたくさんの方々に支えられ、協働意識を持つことやスケジュール管理の重要性など、多くのことを学び、完成までたどり着くことができたと思う。

新衣装（図18）は、でんしろの足の色に合わせて、ニーハイソックスの左右を違う色にして着装し、自然を連想させるために衣装全体に手作りの葉っぱの装飾を行った。また、寒さ対策にボレロを作成するなど、多くの改良をし、錦江町の方のご要望に沿った衣装を完成させることができた。自分たちでデザイン画を描き、制作を行い、何度も失敗し、試行錯誤の連続だったが、錦江町の方との5回の打ち合わせで、お互いがイメージする作品に近づけることができた。そして、打ち合わせを重ねるごとに、メンバーのそれぞれが自発的に行動出来るようになったと感じた。



図18 新衣装くわがたガールズ

私たちの制作した衣装は、大学祭の舞台発表でお披露目することとなり、発表当日はでんしろの角が取れそうになるなど、ハプニングも多くあったが、無事に発表を終えることができた。今まで一生懸命作成してきた衣装を正式に「錦江町くわがたガールズ」の衣装としてお披露目できたことが、とても嬉しかった。発表後に舞台袖で錦江町の企画課の方が熱い握手とともに「本当にありがとう」と言ってくださったことを、今でも鮮明に記憶している。

また、大学祭では、錦江町の特産品販売のお手伝いもさせていただいた。衣装制作のことで役場の方とお話する機会があったが、地域住民の方との交流は無く、物品販売の活動を通し初めて、錦江町住民の方々と交流することができた。販売された商品は、原料生産から加工まで全て錦江町で行われており、錦江町の方々が試行錯誤し、こだわり抜いて作った商品であることを、販売活動のなかで知ることができた。そして、錦江町の魅力を今度はもっと多くの人達に知ってもらいたいと心から思った。

地域貢献プロデュースのメンバーは、それぞれGプロジェクトの活動もあるなか、就職活動も並行して行っていたため、メンバーのスケジュールを調整して活動することが難しく、メンバー同士のずれ違いや、完成させることができるのかとの不安もあった。そこで、工夫した点が二つある。一つは、週に一度のミーティングの実施である。時間を使い、みんなで集まって

話をする中で、LINEやメールだけでは伝わりきれいでなかったことが明確になり、確かな情報を共有し合えることができた。

もう一つは、打ち合わせの内容や活動の記録などの文書化である。議事録を作ることで打ち合わせの内容を整理することができ、次の作業を円滑に進めることができた。「秘書実務」や「事務管理」の授業などで学んだことを実践することで、さらに深い理解を得られたのではないかと感じている。

地域貢献プロデュースの活動は、当初の目的であった、くわがたガールズの衣装制作の完成により、大学祭をもって終える予定であった。しかし、錦江町の方からのお声掛けにより、この活動は今も続いている。2014年3月の初めにドルフィンポートで開催された「半島隅くじら元気市」では、現代ビジネスコースの学生が抽選会やアンケートのお手伝いをした。また、同月15日に開催された、「ぐりぶー」と「さくら」の大結婚式でも、新衣装を着たくわがたガールズが活躍している。地域貢献プロデュースの活動は、テレビや新聞などのメディアにも取り上げられ、錦江町のPR活動に協力することができた。それと同時に、本学の活動を知っていただく機会となった。

近年、過疎化や少子高齢化が地方の問題として掲げられているが、鹿児島市内に住んでいるとなかなか実感できずにいた。いろいろな問題を抱えながらも、楽しそうに地域の活性化のために奮闘している錦江町の方々を見て、とても暖かな気持ちになった。

私自身、中学卒業以降、故郷である甕島を離れて生活をしている。島に帰省をするたびに寂れていく島を、とても残念に思っていた。しかし、今回このような活動を通して、地域の活性化のために奮闘している人たちがいることを知り、私も何か力になれることはないかと模索しているところである。ただ寂しく感じるだけにとどまっていた私であったが、故郷の財政状況や活性化のための取組みについて調べるなど、地元に対する意識を大きく変えることができた。

地域貢献プロデュースの活動を通して、授業で学んだことを実践する機会をいただいた。また、学生としてできることは限られており、微力ではあったが、私たちでも地域に役に立つことができるということを体感した。外部の方と関わる中で、普段の生活の中では経験できないことを経験することができ、コミュニケーション能力やマナーなど社会人になるうえで大きな糧を得ることができた。このプロデュースで学んだことを生かし、人とのつながりやあたたかさを大切にしていきたい。これからも本学の地域の活性化のために地域に根差した活動が続いていくことを切望し、私たちの活動をここに報告する。(川畑美和子)

結 び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題で、文部科学省の特別補助である「学部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」の交付を受けて、進められた。今回のプロジェクトの総括として、発表部門の責任者であった、小原琴乃は次のように報告している。

2013年度のGプロジェクトのテーマは、全体の基本方針の「Hand in Hand」とテーマの

「Smiles for everyone～笑顔になる場所～」をもとに考え、「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」に決めた。

今年、私たちは二十歳を迎えた。年齢は大人の仲間入りだが、中身が伴わずに感謝の気持ちや思っていることを素直に伝えることができていない。小さいころは、どんなことでも口に出せていたことが年を重ねるにつれて、できなくなってしまっていた。頭で考えていても、心で思っても、言葉にしないと伝わらないことがたくさんある。

また、私たちは二十年間たくさんの人に出逢ってきた。たくさんの人と助け合い、支え合い、笑い合い、時には苦しみを一緒に乗り越えてきたこともあった。今まで支えてくれた家族、先生方、先輩方、友人に普段はうまく伝えることができていない気持ちを舞台発表や展示、食品販売を通して伝えたいと考えた。

そこで、二十歳になった今、純大祭という学生全員が協力して作り上げる大きな場所で、自分たちの成長とともに普段なかなか伝えることができていない気持ちを伝えようとしたのである。舞台発表や食品販売では、言葉では伝えることができないので、とても悩んだ。一回きりの発表と販売と展示の中で、どれだけ気持ちを伝えることができるかを、学生全員で考えてきた。

「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」のテーマは、頭の中では考えがまとまっても、表現することがとても難しかった。舞台発表では、心の中で強く想っていても、うまく表現することができなかつたり、食品販売では召し上がってくださるお客さんの顔を思い浮かべながら何回もの試作を重ねてもうまくいかないことも少なくなかった。

また、素直な気持ちを伝えようとしたが、うまく相手に気持ちを伝えることができずに仲間同士で衝突し、なかなか一つにまとまることができなかつたのが実情である。一人ひとりの個性も生かしながら、心一つにすることはとても難しかった。素直な気持ちを伝えようとすることで、ぶつかり合い、考えがまとまらずに苦労した。しかし、そのたびに話し合いを重ね、みんなで涙を流したこともあった。心が一つになったのは、最後の最後だった。

入学からずっと一緒に過ごしてきた仲間。Gプロジェクトの活動を開始するまではお互いに意見を言い合うことも、衝突をすることも、涙を流すこともなく、学生生活を送っていた。Gプロジェクトの活動において、人と真剣にぶつかりあうことは初めての経験だった。ほんとうに大変な日々で、逃げ出したくなることもあったが、お互いに支え合い、励まし合い、ぶつかり合い、助け合い、乗り越えることができた。

この活動で私たちは以前より人の心を感じることができるようになったと思う。また、素直な気持ちをそれぞれにしっかりと言葉でも表現できた大学祭であったのではないだろうか。Gプロジェクトの活動のなかで、たくさんの人に支えられてきた。そして、改めてたくさんの人に支えられ過ごしていることに気づくことができた。

二十年間を振り返り素直な気持ちを伝え、感謝の気持ちを忘れず、そして周りには支えてくれる人がいること、たくさんの仲間がいることを改めて感じる事ができた。人として何が大事かを学んだ大学祭であり、成長させてくれた。(小原琴乃)

現代ビジネスコースでは、学生個々がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設け

られた五つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めるという目的を掲げてから、六年も経過している。毎回、“Gプロジェクト”を通じて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。

共同で何かを成し遂げるためには、多くのことが要求される。すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さと「確認」の必要性を実感したはずである。これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが、現代ビジネスコーススタッフの願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。